

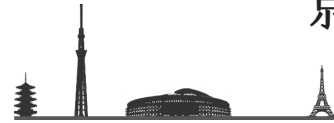
目利き書店員の平積みに感謝：京・江戸・博多、そして巴里：3

南野，森
九州大学大学院法学研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7160660>

出版情報：福音宣教. 76 (3), pp.14-15, 2022-03-01. オリエンス宗教研究所
バージョン：
権利関係：

3 目利き書店員の平積み感謝



なぜ憲法学者になったのか、と尋ねられることがある。いちばんスマートな答えは、大学で憲法学の樋口陽一先生に出会ったから、というものだろうか。大学に入り東京で1人暮らしを始めた私は、学友(悪友?)との毎日が楽しく、それぞれの学問分野で第一人者であられたに違いない先生方の講義なのに出たりサボったりを繰り返すという、実にもつたいない学生生活を送っていた。

2年生の4月になり始まった樋口先生の授業も同様であった。1学年600人が入れる大教室の遙か前方の教卓に先生が着席、マイクを使ってただ喋るだけ。良く言えば厳肅、悪く言えば単調な講義であった。前の方では真面目な学生たちが熱心に聴き入っているが、後ろの方にいる我々は、100分ぶっ通しのそんな講義に集中力もたず、気付けばウトウト……という有り様であった。

夏休み明けのことだったと思う。生協書店に立ち寄ると一冊の岩波ブックレットが高く積まれていた。樋口先生の『ほんとうの自由社会とは*』であった。おや、あの先生だ、くらしいの印象であったが、一方的であれ直接知っている先生の本となればやはり気になるものである。しかも定価は310円。これなら買える。

帰宅して読み始めるとぐんぐん引き込まれ、感動した箇所には赤線も引いた。こんなに立派な先生だったのか。悪友に、あの先生は偉いぞ、いいこと言ってる、と赤線部分を読み聞かせたりもした。次からはちゃんと授業に出ようぜ。

こうして、後期の憲法講義は前方に座り熱心に聴くようになった。先生の試験だけは「優」を取りたくて人一倍勉強もした。3年生で先生のゼミに入れたときは、ほんとうに嬉しかった。文字通り先生の警咳に接することができるようになって

つた私は、その後、大学院へ進学することを決意する。

それにしても、なぜ私はこの本にそこまで惹かれたのだろう。「一九八九・九〇年。去年からことしにかけての世界のうごきほど、歴史に立ち会う臨場感とでもいうべきものを感じとれる時期は、そう多くないでしょう」という書き出しで始まるこの本は、この2年間の内外の状況を踏まえ、憲法の観点から、「ほんとうの自由社会とは」なにか、を讀者に考えさせる短編である。

1989年、私が高校3年の正月に、昭和天皇が亡くなられた。その数ヶ月前から、世の中には「自粛」ムードが漂っていた。翌年には、天皇の戦争責任を認める答弁をした市長が銃撃されたり、新天皇即位の儀式に関連して政教分離の点から憂慮の声明を出した大学長の自宅に銃弾が撃ち込まれる事件もあった。

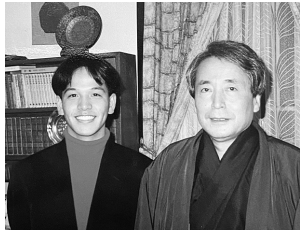
国外では、1989年6月に天安門事件があり、11月にベルリンの壁が崩壊、チエコではビロード革命が起き、12月にはルーマニアのチャウシェスク政権が倒れた。自由に渴く人々が、あるときは国家権力に殺戮され、あるときは平和裏に体制変換を成し遂げ、またあるときは国家権力を暴力により打倒した。

そういう時代状況のなかで、「日本社会を少しずつでも、それぞれの人がよいと思うようにうごかしていくという方向に向かって発言をするという役まわりは、必要なことです」と書かれたブックレットに私は出会い、感動し、将来自分もそんな役回りを果たせれば良いなと、漠然と憧れたのだと思う。そして「王様と軍隊」をどうするか、にまず関心を寄せる憲法学に惹かれていった。それから30年。師の足下に遙か及ばず、という思いは日々つのつっている。



みなみの・しげる●九州大学法学部教授。京都市生まれ。洛星中・高等学校、東京大学卒業後、同大学大学院、パリ第10大学大学院を経て、2002年九州大学助教授、14年教授。AKB48の内山奈月との共著で好評を博した『憲法主義』(PHP文庫)ほか著書多数。

*本書は現在版元品切れ。



ゼミの仲間たちと、お正月に樋口先生のお宅(仙台市)にお邪魔したときの二コマ。なにせ30年前のこと、私も若い先生もお若い。ご夫婦お揃いで学生たちを歓迎していただいた、忘れがたい思い出(1992年1月4日)。